

## 博報財団 第10回「国際日本研究フェローシップ」成果報告書

## I. 研究成果概要

氏名	富田 直子(トミタ ナオコ)
在住国名	ドイツ
所属・役職	ハイデルベルク大学ドイツ語学・ドイツ語教育学研究所 非常勤講師
招聘回(招聘研究期間)	第10回(2015年9月1日～2016年2月29日)
受入機関	お茶の水女子大学
招聘研究テーマ	談話・テキストレベルの情報構造の日独比較・対照研究 -心理言語学の立場からの中上級レベル談話指導に関する提案にむけて-
研究目的	本研究では日独母語話者および中上級学習者による談話データ(「位置関係を描写する」談話)を比較分析することによって、第一に談話・テキストレベルの情報構造における言語間の類似点と相違点を明らかにし、第二に、学習者の発話に関して、どのような形で母語による転移が生じているかを確認する。さらに分析結果を元にして、スロービン(1996)の「話す為の思考」仮説を考慮しながら、中上級レベル談話指導の場で「知識としての文法」から「使うべきところで使える文法」への橋渡しをする教材の作成を試みる。
研究概要:	<p><b>背景と目的</b></p> <p>談話・テキストレベルの情報構造は、テキスト内のどの要素が旧情報や焦点といった機能を表すか、また誰の視座から語られるのか、などの観点から明らかにできる。「語り」の談話を中心とした先行研究(Clancy 1987, Maynard 1987, 中浜・栗原 2006, 渡辺 2007, 2012, 菅沼 2008, 魏 2010, Tomita 2013, 印刷中など)によって、旧情報である主人公の指示に必ずしもゼロ代名詞や主題マーカの「は」が使用されるわけではないこと、中国語や英語などに比べ日本語テキストでは登場人物の視座からの描写が多いこと、単文レベルの文法や語彙に優れた中上級学習者であっても、上記のようなテキストレベルの習得は難しいことなどが実証的に明らかになってきた。本研究では今まであまり取り扱われてこなかった「位置関係を描写する」談話を、日独の母語話者および日本語学習者から収集し、そこにおける情報構造を比較する。さらに分析結果をもとに、スロービン(1996)の「話す為の思考」理論をふまえて、中上級レベル談話指導に関する提案を行う。</p> <p><b>談話データ</b></p> <p>非言語的刺激(「公園のイラストマップ」)を利用し、日本語ネイティブ、ドイツ語ネイティブ、ドイツ人日本語学習者(中上級レベル)の3つの話者グループ(各15名)に、公園内の建物や広場などの位置関係を示すことによって公園を描写するようお願いし、話してもらった談話を録音・文字化した。</p> <p><b>結果:</b></p> <p>日独母語話者の談話データの分析から、(とりわけ「視点」に関して)異なった情報構造が、母語に応じて選好されることがわかった。また、学習者の談話データの分析からは、「概念化プロセス」レベルで母語による転移が生じていることがわかった。</p> <p><b>展望:</b> 「視点」概念に対する学習者の気づきを促すための様々なタスクを教室活動に取り入れることを提案したい。教材と教師用マニュアルをセットにしたリーフレットを作成予定。</p>